

必修テーマ【漢文】

入試頻出ジャンル 問答

テーマを学ぶ意義

■「問答」とは

「主人公への問いかけと、その返答」という形で展開する、漢文の表現形式の一つ。

■入試頻出の理由

起承転結が端的にまとまっているため、ストーリー展開の把握を問う設問が作りやすい。また、主人公の発言から主張を読み取るといった抽象理解力を問う設問が作りやすいのも理由の一つである。

到達目標

■問答の頻出パターンを知り、肯定／否定の評価を把握しよう

今回は「問答」の頻出パターン二つを押さえよう。主人公の返答によって、主人公の意識の高さを知った周囲が感銘を受けるといった流れが多いため、回答者が話の中心である。それを理解すれば、問題文の重要部分がどこなのかが把握しやすい。

例文

『史記』より

A *徐君好_ニ季札_ノ劍。季札未_レ献。徐君已_ニ死_ス。

【訳】徐君は季札の劍が気に入った。(しかし)季札は献上しなかった。(そのうちに)徐君は死んだ。

B (季札) 繫_ニ其劍_ヲ徐君塚樹_ニ而去_ル。

【訳】(季札は)その劍を徐君の墓の樹に掛けて、立ち去った。

C 従者曰_{ハク}、「徐君已_ニ死_ス。誰_ニ予_ヲ乎_ト。」

【訳】(季札の)従者は言った、「徐君はすでに死んでいます。だれに与えるのですか(そんな必要はない)」と。

D 季子曰_{ハク}、「不然_ヲ。始_メ吾心已_ニ許_レ之_ヲ。豈_ニ以_テ死_ヲ倍_ニ吾心_ニ哉_ト。」

【訳】季札は言った、「そうではない。もともと私の心中でこのこと(＝徐君に劍を献上すること)を許していた。どうして(徐君が)死んだからといって、我が決意に背こうか、いや背くことはできない」と。

注 *徐君・季札^二ともに人名。 ◎未^{いま} 〓再読文字。

◎誰^{たれニガ} 〓乎^{シヤ}。 / 豈^{あに} …… 〓一哉^ヤ。 〓ともに反語。

典型的な展開

A 設定〔場面・人物など、基本的な情報の紹介〕
何らかの**事件や事柄**が発生する。

B 主人公の意外な発言、または行動

Aとはつながりにくい、**予想外なことや無関係なこと**をする主人公。

C 周囲の者の素朴な質問・反発

Bについて**そばにいる人が質問**する。

疑問……（なぜそんなことをするのか？）
反発↓反語……（そんなことは必要ない）

D 主人公が相手を説得する 〓 説得文 — 真意を説明 —

相手に**事情を説明**。

①セリフは長め。

②構成はある程度型がある（次ページ以降で説明）。

③セリフが終わると文章も終わる。

↓「相手は理解した」ということで話が終わるため、相手の反応は省略される場合が多い。

訓読

徐君季札の剣を好む。季札未だ厭せず。徐君已に死せり。（季札）其の剣を徐君の塚の樹に繫けて去る。従者曰はく、「徐君已に死せり。誰にか予へんや」と。季子曰はく、「然らず。始め吾が心已に之を許せり。豈に死を以て吾が心に倍かんや」と。

1 主人公が自分のために行動するパターン

A 何らかの物語の設定。

B 主人公が、一見よく理解できないようなことを言ったりしたりする。
・世俗的な価値観（目先のことだけにとらわれがちな価値観）では
推し量れないようなことが多い。

C 他者には、それがどのような意味を持っているかわからない。そこで、その理由を尋ねる。もしくは、反発して主人公の行動を否定する。

・質問者は、取るに足らない人物である「御（運転手）」であることが多い。そんな相手にも、主人公ははぐらかすことなく誠実に説明する。
・**C**の部分はときに省略されることもある。

D 主人公が、見習うべき優れた価値観を説明する。

もう一つ、特定の誰か（目上の人物）に誤りがあるときに、主人公が行動するという文章展開がある。

2 主人公が特定の誰かのために行動するパターン

A 設定として、「誰か」が何かをする。

・相手が、一般の人ではなく君主なら、「諫言文^{かんげんぶん}」となる。文章の全体構造は今回の【問答】に近いが、【諫言文】に特徴的な部分もあるため、これについては、「必修テーマ 諫言」で取り上げる。

B 主人公が、一見よく理解できないようなことを言ったりしたりする。

C 「誰か」には、それがどのような意味を持っているかわからない。そこで、その理由を尋ねる。もしくは、反発して主人公の行動を否定する。

D 主人公は「誰か」の過ちと本来あるべき姿を説明して、それを正すように説得する。

・**D**の説得で文章が終わっていたら相手は納得し、行為を改めたと考えればよい。

※ときに**B**や**C**が略され、**A**→**D**のこともある。

読解のポイント

この二つのパターンで最も大切な点は、主人公が**A**のどこに着目し、それを**□**でどのように説明・説得したかに尽きる。中でも**□**を理解できているかどうか読解のポイントになる。

注意すべきは、**□**がひと続きのセリフであり、そこには相手を説得するための文章構成の型のようなものがあることである。それが理解できれば【問答】は理解しやすくなる（もちろん文章展開の順番は、あくまでも目安であり、文章によって前後する場合がある）。

重要な文章構成 □の説明・説得の型（長いセリフ）

素朴な質問を受け、

1 【問題提起】 人としてとるべき態度・意識

例・知識階級が人生のお手本としている書物からの引用

・昔からの常識を確認

※「……で良いはずがない」と逆の方向から示されることもある。

※次のような表現で始まることもある。

「我（しん・まよ）聞（ク）……」（＝私は『……』と聞きます）

「君不（レ）聞（カ）……」（＝貴方は『……』を知らないか）

2 【分析】 1の特徴や現象を並びたてる

例・やや抽象的な特徴／現象（対句になる事が多い）

・寓話など具体的なたとえ話（「虎の威を借る狐」など）

※抽象的な分析だと読解が難しくなりすぎるため、入試問題では具体的なたとえ話の方が多く出題される。

3 【現状】を再確認

1・2と照らし合わせて、次の点を示唆する。

- ・現状のままだとどうマイナスなことになるか
- ・どのような態度であるべきか

※文中に「今」の語が急に出たら、3の開始の合図。ただし「今（、）」という形なら、「もし〜」という意味なので注意しよう。

4 【結論】 1の内容を再確認し、あるべき態度を示す

※4が明白な場合、4は省略される。

※□の説明・説得の内容がよくわからない時は、2のたとえ話によって複雑になっている場合が多い。まずは、2を読み飛ばして先に3や4を読むと理解しやすい。

☑ チェックテスト

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

1 * 裴晋公^{はいしんこう}在^{リシトキニ} 中書^{チュウシュ}、左右白^{まうすニ} 以^{テス} 印^ノ 失^{スルヲ} 所在^ニ

聞^ク之^ヲ者莫^シ不^レ失^ハ色^ヲ。度^チ即^ニ命^ズ 張^リ筵^ア拳^ゲ 樂^ク。人不^レ

曉^サ其^ノ故^ヲ、窃^ヒ怪^シ之^ヲ。夜半飲^タ酣^ハ、左右復^タ白^ス 以^テ 印^ヲ

存^ス 焉^ヲ。度^ハ不^レ答^ヘ、極^メ 歛^ラ 而^ヤ罷^ム。

5 或^{ヒト} 問^フ 度^ニ 以^テ 其^ノ 故^ヲ。度^{ハク} 曰^ク、「此^レ 出^ヅ 於^テ 胥徒^ニ 盜^{ミテ}

印^ス 書^ク 券^ニ 一^ニ 耳^ヲ。緩^ニ 之^ヲ 則^チ 存^シ、急^ニ 之^ヲ 則^チ 投^{ジテ} 諸^ニ 水^ニ

火^ニ、不^ト 復^タ 更^ニ 得^レ 之^ヲ 矣^ヲ。」時人服^ス 其^ノ 弘量^ニ、臨^{ミテ} 事^ニ 不^レ

撓^ミ。 (『玉泉子』)

注 * 裴晋公 唐代の政治家。裴度のこと。 * 中書 宮中の文書

や詔勅をつかさどる官。 * 印 高級官僚が事務の手續に用い

る印鑑。 * 張筵拳楽 宴席を設けて、音楽を演奏する。 * 胥徒 徒 役所の下役人。 * 書券 契約書などの書類。

問

傍線部「命張筵拳樂」とあるが、裴晋公はなぜこのようなことをしたと考えられるか、次の文章を穴埋めする形で説明せよ。

自分が (①) すれば、盗んだ犯人は恐ろしくなって印を処分してしまうだろうが、(②) 態度でいれば、犯人は黙って印を (③) だろうと判断したから。

解答

- ① 厳しく追及
- ② 穏やかな
- ③ 返す

解説

この文章は主人公である裴晋公が自分のために行動しているため、「パターン1」にあてはまる。まずは文章の構造を見ていこう。

- A** 裴晋公の「印（＝判）」がなくなった。周りの人々は慌てる。
- B** 裴晋公は、犯人捜索もせず、「張筵 挙楽」ことを命じた。結果として「印」は発見される。
- C** ある人が**B**の行動について質問する。
- D** 裴晋公はその行動意図を説明する。

設問は、**B**の「張筵 挙楽」について裴晋公の意図を問う質問だから、**D**のセリフに着目しよう。「急」な対応のデメリットと「緩」な対応のメリットとを確認し、それをまとめればよい。

また、ℓ1「左右」は〈側近・身近〉の意味。漢文ではよく出てくる言葉なので、覚えておこう。ℓ1の「白以」は「以白」の倒置形。「動詞」^{（連体形）}「以……」で〈……を〔動詞〕する〉と訳す。ℓ3「窃」は〈こっそりと〉の意味。ここでは、〈他の人には言わずに〉内心では〈などと訳すとよい。ℓ7の「不復……」は部分否定の句形で、〈二度と……しない〉の意味。

訓読

裴晋公中書に在りしとき、左右白すに印の所在を以てす。之を聞く者色を失はざるはなし。度即ち筵を張り樂を挙げんことを命ず。人其の故を曉らず、窃かに之を怪しむ。夜半飲酣にして、左右復た白すに印の存するを以てす。度答へず、歡を極めて罷む。或ひと度に問ふに其の故を以てす。度曰はく、「此れ胥徒の盗みて書券に印するに出づるのみ。之を緩にすれば則ち存し、之を急にすれば則ち諸を水火に投じて、復た更に之を得ず」と。時人其の弘量にして、事に臨みて撓れざるに服す。

全訳

裴度が中書省にいたとき、側近が、印がなくなつたと申し上げた。それを聞いた者はみな青ざめ動揺した。裴度はすぐに宴席を設け、音楽を演奏するように命令した。人々はその理由がわからず、内心不審がつていた。夜中、宴もたけなわになったとき、側近がまた、印が見つかったと申し上げた。（けれども）裴度は何も答えず、宴を楽しみ尽くしてお開きとなった。

ある人が裴度にその理由を尋ねた。裴度は言った、「これは、下役人が書類に印を押すために盗んだにすぎない。穏やかに構えていれば印はなくならないし、厳しく調べれば印を水や火に投げ入れ、印はもう二度と手に入らない」と。当時の人々は裴度の度量が大きく、物ごとに動かないところに敬服した。